

特集 宮澤名誉会長と星槎と私

実行、実現する人

兎 玉 ゆう子

宮澤保夫名誉会長（以下、宮澤会長）が残されたことは多々あるが、それらに共通していることは「他人（ひと）のために成し遂げて」来られたことである。そして、他人（ひと）にとって必要なこと、社会にとって必要なこと、必要と考えることをただ単に論じるだけでなく、実行、実現されてきた。実行・実現、この点が多くの人と異なる点である。あれが大切、これが大事と言うことは誰にでも出来るが、実現することは並大抵のことではない。その陰には多くの“仲間”の支えがあったことは想像に難くない。そしてその仲間、部下を大切にしてくられたからこそ、現在までの星槎の発展がある。実現にこぎつける力、一緒に成し遂げてくれる仲間をつくる力こそ、我々、星槎大学の教職員が宮澤会長から学ぶべきところであろう。

宮澤会長との思い出の中でも特に印象深い「東日本大震災後の支援活動」、「早稲田大学大学院平田竹男ゼミでの学びの時間」、そして、星槎に赴任して間もないころに伺った「納税できるひとに育てる、社会の中で生きられる」というエピソードについて、書かせていただこうと思う。

宮澤会長の東日本大震災後の支援活動での活躍

私が宮澤会長といろいろなことを一緒にさせていただくようになったのは、東日本大震災後の南相馬市や相馬市での支援活動から（はじめて出会ったのは、おそらく2007年頃）である。当時、宮澤先生とお仲間の皆さんはアマチュア無線の強みも活かし、震災直後の早い時期から南相馬市や相馬市での支援を開始された。その後、当時、私が所属していた研究室も宮澤先生とは別ルートから南相馬市や相馬市への支援に関わるようになり、被災地にはいるにあたり、宮澤先生を頼り、そして現地でのロジスティックス全般を支えていただくことになった。

宮澤先生、そして星槎チームの皆さんのロジ力はすさまじい一言である。当時、いろんな不便がある中、美味しいコーヒーを毎朝頂くことができたり、食事が毎食提供されたりと支援に夢中の我々のチームを支えてくださった。我々が“生活”のことを考えずに活動できたのは宮澤先生をトップとする星槎グループの皆さんのおかげであった（上 昌広，2012）。

また、我々は医療チームの一員として地域住民の方の健康診断にもかかわった。その際のロジも星槎チームで行われ、中心には宮澤先生、宮澤先生の明るい大きな声が響いていた。「まずは命。命がまもられてから教育だ」と我々医療チームの支援をしてくださった。宮澤先生

をはじめ星槎の支援チームの皆さんは日々、できることをコツコツと積み上げられ、被災地の方からの信頼を得、夏ごろからは市内の子どもたちの心のサポートを引き受け、西永堅先生や三森睦子先生、大村真弓先生などの支援は今も続いている。

早稲田大学大学院での様子

宮澤会長は2013年4月早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士課程(社会人1年制コース)に入学された。忙しい合間をぬって、学業に励まれている姿を紹介したいと思う。私は非常勤講師として「院生」宮澤保夫さんとかかわった。早稲田で一緒に過ごさせていただいた1年はそれまでにも、その以降にも見たことがない笑顔で過ごされていた。ほんとうに学びが楽しかったのだろう。と、今は振り返ることができる。そんな笑顔の日々のエピソードを紹介したい。

入学当初の「院生」宮澤さんは、指導教授である平田竹男先生に「話が長い。もっと端的に」とは何度となく、言われていた。しかし、夏ごろからメキメキ変わられた。重要なことを「ピッシッと」的を外さず発言されるようになった。そして、大切なことから。この変化を目の当たりに、「人間何歳になっても成長できる」とあらためて感じた。そして、宮澤さんと同い年の同級生がまだまだ長く話されていたら、時間を計って「2分30秒。 三分の一にできるね」といわずらっちな顔で話されていた姿は忘れられない。宮澤少年に会ったようだった。そして、このコメントに教室は大爆笑、大学院のゼミでも自然とみんなの中心におられ、チームを盛り上げ、みんなに愛され、慕われていた。

そして、大学大学院の集大成として取り組まれた修士論文「不登校、学習障がい、発達障がい生の教育的環境づくりについての研究—星槎グループの発展過程—」は優秀論文に選出された。宮澤さんが、ある一人の少年に出会い、そして今日の星槎の形ができるまでの実践を振り返り、途中に経験した様々な困難をどのように乗り越えたのかをビジネスモデル研究の形も借りながらまとめられた。「宮澤節」でなく、学術用語に直しての発表は苦労が多々あっただろう。この論文は同業の学校法人の理事長から「星槎のバイブルですね」と評価されていて、修士論文の要約版は共生科学でも掲載された(宮澤保夫, 2014)。

当時から「生きているうちにまとめて残したい」が口ぐせであった。論文執筆の段になると、毎朝4時頃にデータ分析の結果や論文の原稿論文がメールで届いていた。この様子からも宮澤さんの熱意が読者の皆さんに伝わるだろう。星槎の記録、データを残す、活用する。この点においても宮澤さんは自らモデルを示されていた。

また、大学院のゼミ活動でゼミのメンバーは、大磯はもちろん芦別から沖縄まで星槎のさまざまな施設を見学させていただき、施設をお借りしてゼミを開かせてもらった。宮澤会長が在籍されたゼミでは多様な背景、全く異なる職業、様々な年齢の同期がいまだに仲良く、切磋琢磨できているのも何度となく寝食を共にし、楽しい時間を過ごしてきたからだろう。大人になってまじめな話をまじめに話す。そして、ゼミの時のようにみんながお互いのフレームを理解して話をする。お酒なんてなくても楽しい。そんなかけがえのない仲間づくりが加速したのも、宮澤さんの存在があったからだ。宮澤会長が亡くなった時にはみんながお悔や

みのメッセージをすぐに寄せてくださった。昨年12月に一度同期会があったが、宮澤さんは体調不良で出席がかなわなかった。それでも夢を実現した同期と一緒に祝ってくださり、みんなの発展を共有しあった。これからもゼミの同期会に宮澤さんも天国から参加されることと思う。

ところで、宮澤さんはいつも「何も大学の先生がえらいんじゃない」と言われていた。考えを書き示すだけじゃ半分以下、やってみて、失敗もしながら、成し遂げ、社会で実装することこそが星槎に関わる大人のすべきことと、話されていた。そして、論文を仕上げる過程でのゼミでのディスカッションや発表は学びをへて、宮澤さんは、「実践、成し遂げることはもちろん最重要、それに加えて、これからは教育の現場にあるたくさんの良い実践を社会に伝えることも活発にしていく必要があるね。星槎にも大学、大学院があるけど、研究のための研究ではなく、よい実践を社会に広めることにウエイトをおいた大学、大学院にしていくことが次の課題だね。」と話されるようになった。

そのような話を繰り返す中で、「学びたい看護師さんを支える環境の一つとして、大学院に看護教育のコースがあってもいいね」と話に及ぶようになり、多くの方の協力を得て2015年4月に教育学研究科に看護教育研究コースが開設された。開設にあたっては松本幸広前大学院事務局長に大変お世話になった。松本氏のように、宮澤さんが「社会から求められている。星槎がやりたい」と思うことを実行・実現するための様々な調整、地ならしをされる人たちの存在があるからこそ、多くのことを成し遂げてこられたのだろう。それぞれが様々なアイデアを持ち、アイデアを結集させ形を完成させる。長い年月をともにしている人たちとの信頼関係、ゆるがない心のつながり。星槎全体が家族のような雰囲気、人の温かさはいつまでも星槎に残し続けなくてはいけないものだと思う。

「学校にとってスポーツは大切なんだ。もっとスポーツの道も広げたい。星槎からメダリストを出したい。」とゼミの中でも話されていた。在学されていた年の8月には、日本でのオリンピック開催が決まった。開催決定後は、ブータン、エリトリアといった国々からも東京大会に選手を安心して送ることができるように、出場できる選手を育てられるように、これらの国に対して様々な支援をされた。ここにも星槎グループ、星槎大学の職員の方々の協力があった。そしてついに、東京大会、その後の北京冬季大会では星槎からメダリストを輩出した。宮澤さんの夢がまた一つかなった瞬間を一緒に過ごせたのは幸せに思う。

宮澤さんの協力してくれる仲間を見つけ、みんなを味方にして、社会に挑戦するという姿勢は大学院生活を通じて、新しい仲間も得て一段レベルアップされたと感じる。60歳を超えて大学院生となり、学生証を久しぶりにもつ宮澤さんは本当に楽しいそうだった。自身も社会人院生として学ばれた経験は、大学運営についての考えが変わるきっかけになったのだろう。何かと大学を気にして下さることが増えた。あらゆる年齢の学びたい人を支える環境づくりを星槎大学に籍を置く一人として、さらに貪欲に求めていきたいと思う。そして、素晴らしい教育実践を世に広げていくことを加速させたい。

納税できるように育てる、社会の中で生きられる

星槎大学に入職してまだ間もないころ、私は理事長室に呼び出しをうけ、これからのことについて、たくさん話す時間を頂いた。そして、星槎のあらゆる取り組みの中で宮澤先生が大切にされていた思いを聞いた。それが星槎に集う子どもたちを「納税ができる社会人として育てる」ことが根底にある。ということだった。様々な取り組みをするのも、その子にあった、その子にできる稼ぐ手段を見つけるきっかけになる。そして、納税をすることが社会で生きる一人として認められる上で大きな役割を持つんだ。ということの説明をくださった。ただ、卒業資格を得られたら良い。そこで終わりじゃないんだ。卒業し、星槎を巣立った後にも社会の中で生きていける道筋を一緒に探ることに意味がある。そのための教育なんだ、と。

目の前の子どもたち、生徒がどのようなレベルであれ、納税ができる社会人として育てるこのことの実践できている教育関係者はどれだけいるだろうか。出会った子どもたち、生徒の将来を見据え、支える、それぞれに見合ったレベルで自立し生きていく術を身に着けるといふ本質的な教育の役割を今一度我々は考えなおすときのだろう。そしてこれからの教育活動に反映していかなくてはいけない。

益々厳しさを増す社会情勢に直面している今、この大きな社会的課題を宮澤先生と議論できないことはとっても残念である。しかし、先生がご縁を繋いでくださった、多くの仲間と共に子どもたちのために大人は何ができ、何をすべきか。回り道をしながらでも社会に必要とされることを実現するために引き続き、頑張りたいと思う。

最後に

最後にとってもプライベートな話である。2010年の夏ごろだっただろうか、「児玉さん、ゴルフしないの？ 絶対した方が良いよ。ウチのすぐ裏はゴルフ場、星槎のゴルフ大会も毎年してる。俺はもうゴルフは引退したけどね」とゴルフを始めるよう勧められた。会長にすすめられるならと、私はほどなくゴルフをはじめた。そして会長とともにブータンを訪ねる機会を頂いた際に、会長のお友だちが管理されていたブータン、ロイヤル・ティンパー・ゴルフ・コースでコースデビューをさせていただいたことは私のゴルフ人生において忘れられない出来事となっている。

多くの人にチャレンジのきっかけを与え、黒子のように成功に導くよう支えてこられた宮澤会長。そして自らも人のためにチャレンジし、実行、実現してこられた宮澤会長。宮澤会長から頂いた多くの学びを糧に、星槎が実行、実現する集団であり続けるために私も努力を続けたい。

引用

上 昌広. (2012). 復興は現場から動き出す. 東京: 東洋経済新報社.

宮澤保夫. (2014). 共生に向けての共感理解教育の導入. 5 (5), 95-110. 共生科学.